

【知事賞】受賞作品と選評

【短歌】

厳冬に耐へて生きしか野兔の新しき糞雪にまろべる 宇津田 テツミ

冷厳な自然の営みに耐えて生き抜く小動物に愛しさを覚え、同時に生きることの厳粛さに思い至ったのでしょう。下二句の写生が印象深い。

【俳句】

古き名を残す町並牽牛花 森木 八潮

戦後七十年を過ぎると町はおおしく変わって来た。古い物を壊し近代的な商店街やビルなどが町の中心をなしている。その様な表通りを外れ裏通りに入ると昭和の匂いのする格子戸を持った家並がみられると何となくほっとする。

掲句の牽牛花は朝顔の漢名である。朝顔は朝咲き一日でしぼんでしまう儂さももっている。「古き名を残す町並み」と表現して江戸時代の古地図に残る自分の住まいしている町に変わらぬ人情と、毎年朝顔を鉢植えにしている住人との交流が推測されている好句である。

【川柳】

ポケモンゴー先の読めない嵐吹く 仲田 美千代

今年の爆発的な人気ゲームであるポケモン GO。子どもだけでなく大人も夢中にさせてしまうので、大きな社会問題になっている。何がブームとなって、どんな弊害を呼び起こすのか、起こさないのかは、全く見えて来ないが「嵐吹く」、と作者は結んでいる。社会現象の不安を、上手く作品に纏めあげている。

【詩】

「忘れモノ」 金築 雨学

認知症状のある父親を自宅で介護している男（作者）の日常がリアルに描かれています。男は父を歯医者に預けたまま、あれこれと買い物をして（満足して？）家へ帰りますが、春の一日が暮れそうになって、ようやく父のことを思い出します。一見滑稽なエピソードのように書かれています。家族介護の実情の一端が垣間見えます。

老人介護という重く、深刻な問題を題材にした作品ですが、読後にどこかほっとする気持ちにさせてくれるのは、作者のやさしさが作品全体を覆っているからでしょう。

【散文】

「蝶たちの歌が聞こえなくなるまで」 綾瀬 裕

玄丹かよ（錦織加代）を題材にした掌編小説である。明治初年、西園寺公望を頭にする山陰鎮撫使が徳川家の親藩であった松江藩を吟味のため訪れたとき、玄丹かよが鎮撫使に身をもって抵抗し、藩を救った話を下敷きにしている。主人公の舞は松江市の小さいスナック「香夜」のウェイトレスとして学生アルバイトしている。五月のある日、スナック店主の加代ママの誘いでドライブに出かける。ママは店を畳んで県外に行くことになった。

ドライブはママの思い出巡りであった。ドライブしたあと、島根県立美術館のある白湯公園のお加代の像に見に行くことになった。いつか、舞はママを鎮撫使事件の加代と重ね合わせて見ていた。後日、スナックに行ってみると店は無くなっていた。「意識の流れ」を見事に描いた好作品である。

【ジュニア部門大賞】受賞作品と選評

【短歌】

「久しぶり」「お前だれだ」と友人に何があったかこの半年で 大野 美咲

どちらが私の言葉で、どちらが友人か。読み方で歌の印象がずいぶんかわります。私から見た友人が変わったのか、友人から見た私が変わったのか。見なれているはずの人が、まるで見知らぬ人に見える、面白いですね。

【俳句】

風鈴は風が奏でるコンサート 恩田 玲美

風鈴が沢山並んでいる売り場で、どれを買おうかと迷っている作者。一步退いて風鈴の飾りを見ていると沢山の風鈴が奏でている音は、一つ一つが違った音色でも皆良さを持っていてコンサートであると感じた作者の感性が素晴らしい。

【川柳】

ライオンに負けないくらい強くなる 山本 友晴

ライオンが百獣の王であることを、ジュニアである作者は知っている。「ライオンに負けないくらい」このフレーズはまさに圧巻であり審査員一同、圧倒された。やがて若き獅子が、たてがみを煌めかせながら島根文芸に躍り出て来る日を頼もしく重ねる。

【詩】

「五月」 奥村 芽唯

短い詩の中でいろんな発想が生まれていて面白いですね。名前のこと、こいのぼりのこと、風鈴、かき氷へと、どんどんつながっていきます。「プールでけのびをしているみたい」はうまいたえですね。とにかく元気があって良い詩です。

【散文】

「まる子」 原 優樹

まる子は保育園の帰り道で出会った猫である。生まれてから一年もたたない子猫だった。まる子は妹のようにかわいかった。それから一年ほどたったある日、かわいい赤ちゃんを産んだ。いたずらっ子のティラノ1、大人しいトリちゃん、好奇心おうせいのチビちゃん、原意な三匹の赤ちゃんだった。まる子は第二に母になって、ぼくを守るようになった。拾った猫が赤ちゃんを産んで母性愛を発揮する様をユーモア溢れる文章で描いている。